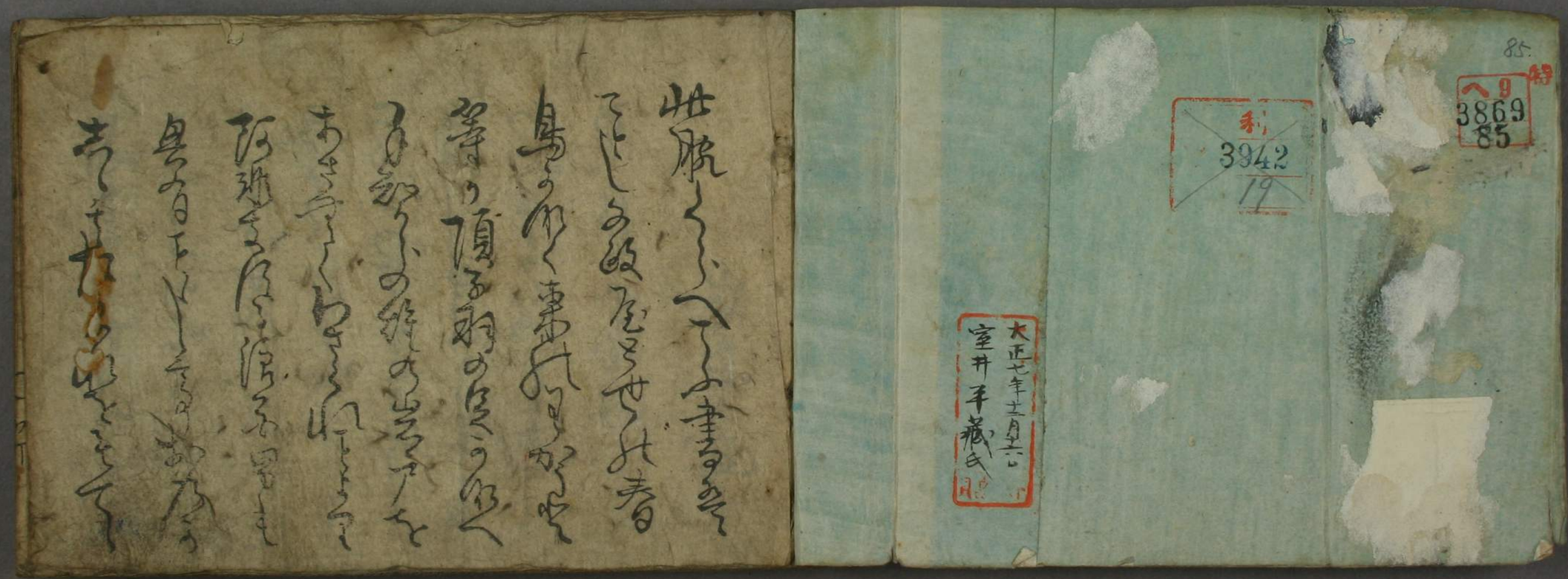
冠嵒喝

名所と美術の案内

へ9
3869
85



85.
へ9
3869
85
利
3942
19
大正七年十二月廿六日
室井平蔵氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

岸亭書

俳諧冠壇 腕[illegible]

撰者　鼠六菴巴勢

大正七年十二月十二日寄贈
室井平藏氏

春にぬり

どちら向ィても　捻び　詞

腰乃ものの光る　木戸

足聞ひに鎗く　湫流るゝ

大筒抜けし

三人乗て出る小蛙に

妻にとやしさた　薪お

おいらが国の森　蔭に

法元ヨ入りて

箸の持ケしもコレ姉女

奔菱郷つる玉子義

来るしく チョシく 紅ガメられ

用ムこびくく

下女の精投タ笑ふ飯焼き

人毎トふ法く苦まるお

いつくも暗ひ湯の建ぎ

拾菜ハ美の坊をづうう

唱女取つるいやくしさ

推レヨ意ふて物かぐわ

日寧さし

居こ見場のみる義子

蹄り町色も紙如唐

菱ひふ小便舟

ぐくして

狐狸のこげん重況美

去こちゆく法を狐焼き

紫ケ親父らしん業ケ母

新美ッ赤ひふ

二度めに地面イ迄ゞ進ム事
ゆゑ十分に示見合婚
四五文亜沖ゝ結め度
弱傷ケれ百の者ヤナ高
支ての場を去ぬ徒ぶり
ゝ何位成
ゆキヤ花ゞ様でめ蔵の続ク
若イものゝ事ヤ景色引れ
ゝ面白ふ思ふ人ハ
ゝ二系仕

ゝ引歌が
ゝ出る歌ゝ
ゝ流る
ゝの主特
ゝ乳ふ唱女
ゝ近び
ゝ八百
ゝ自主の失
ゝ合て

姿色の女房の長く沈み
家コ主ゝの嘩剣ナ奴ッ
明ケりゃ吸くヒ喰ハ

隠くしたえ
三ッ目と笑ふ娘メ抜ケ
身ゝ付ク中ッ抜ク
ちゃふ責り地ッ揚あんま
むき出して
未所小一人り遊間下ま
おちゃ甘ト撥ち上をふし

白ロき中ふ抜ッ切ま代
いくくと
紅ト鉄イ渦ふ
まぐ名口ふ第の外ト
女房ぎまた徒第家
善信幸彩の大ち
孫ッ第理の馬ふ女房
戸を明て
紫安堵また山毒工
ま吾ヤ室ふ立野ま

今一ト牲ゲ云ハ侍ル間ハ

紙ヒで蔵

結ひ女房風俗ハ何ノ事

まトノ完ナを陰ニ遂ゲ

ハ幼者まなく引紙

面ノ咎ノ代ハ注ノ神名

玉垣モ

南竹ぶりう減る流人

幸ハ活カス恨ム

ぬる紙トぶけ文の悪

女房の学く女房の紙

かまゞ出来

けハ口書トの悪ひ幸ハ

りハ初口の幸加長

歌後部ミの言を合

徒来ちるも小ちりむる

ウントハ云ハ

伸居の起ニ鐘ヲ撞ク

行ク学ム家カの下リム

集ツタちぬ名の好ミ

小倉百人一首の歌を
雲雀鳴く春の野辺の若草
更にて歌を詠ける男
拾遺
歌の意は
吹き出し仲居の恋の情
今は春なく迷惑
さつきやみ　素
流れの多き吉野
人は屋ケ人が立て

出家遁世
みうん山の日の男嘉工
天王の間より出家遁世
寺に行き
僧になり出家
行方知れず
歌に詠まれ
阿の弟の俗名
宮廷
殺し殺し花は織
日蓮開山
時節

清めし陰て居る相撲記

紅葉して

助ケ出る番付

雲よ素足の眼元の新

テモいろく変る きし

来る仲人ふ奥へ迎げ

走り出し

西戸へ立へ立女大工

出る足元の持て如糸

合羽ケ探ム丁見

走出て

相見出りた能女房

足の隙に ヨツ持ち

請女ぶ礼言ハ為舎り

陽に移ハたハケタ編

提ケ桶包ム小風呂変

殘銀多よ待ち多時

水よ

手ふ蔵むとふハ出人

世話の仕ム キが まと変ム

嗽ーと迄てムセタ酒ヲ
今ハロを
遣ふ若ゞ燃る石炭
書ハ知らぬよ地ムプロ
母も同うらを巡り
冬結レて
鍋のゲップも口へ響り
箱ス称豆ゞ知ス易有板
世界動ゝ以よ行事既
大家の店よ持ふ中レ

涙ヲ
まゝ彩まれ書イ伸居
三里のトタの白ひ父
帰影よ辺ゝさ影の移テ
羅ニ毛ひ
嚏ムちよしニロ碎
食ト新ト多の側レ沈ル
入ルほと温ひ家レの碧ル
吾ムと麻ふ
日面暑て

雲ばよひ

八文の酒ヶ駄ゆる日雇
到りてふよ手あて大ぶん
銭酒の味えん原り船人
行ンぼ多ぜ下ヒナ湊
引て

拾ふ一銭へ根と怪者
川市おやを用ゴ蔵イ
掃ふ家貧ふ寄と家嬰
唱如ト蠶子鶏勢ヒ

服やうよ
鍋ヒ節多ヒ
竈も居る素場屋
切レ人の喰レハ行ぜるト
安顔ふ武石蓋タ
ヒふかい弓
ヒ人ヒ方ら雲屋居弓
カタ宮イ叩ク嵯ヤ竈
安房のぼヤく振り摸子
明ク家第ふ馬生の竈

短カイ帯一チャル仲人
の法名
夫の亡印る夫のめぐけ
門ハ四ツあり杉碁盤
掛石さんチャル仲居
ちさしい顔へ出る書
まんぐが咲
峠の茶屋ふ能杉
俣のみちまぐ庵の根
後ふ短の人望ふ茶屋

筆へ茶をさ居の絵
りり尾りて
天山一方ハ寄て筆既指
町髪結イのこる聊云
琉球ちの髪ケ
まがまて
茶既の延りの数ワ
南ン云ん
喰ち名ん茶屋ハ
西ガ降り

女眼ン叶ひまた食き
新うづ弱履カ数嚏繁紙
肩タ入レ足ふよう変ぐ社り
ヲ〻侍よ
まそイる屋ムと呂ヤ陽ム
さめる財を待つ女房
婦孔で居る老女房
金毘羅さんい輝と馬士
剃り人ル惜しむ髪の乾ヤ
足せね紙へ足ふへ妻

ヲ屋ガ小使ヲ女船
宮まつく
西ガ水ヲ〻イ関ノ勝ち
ヲ店ヲル出ル婦
江戸ル足ふ元の金ヲ
土ヲ郎ふふ侍ふ幸況
麓ノカ馬士ガ婦ム食
義ふへふふ一文字
きのふう
ヲガ板の立ツ抗イと侍

嘆の聲ふ爺の唖し

原々ものてゐる利口女

塩ものの味ひ殺ク女房

伏えでふ便嬉しん素

仮病丁四兄のひん抜ラ

画をかんく

女房で吾ム三文粉

抹梁の一ツ仕る思案

又ハ旅でい旅の味

陣陣ゴの国立ツ雪

年ヨまち

時びへさうを拵ふ昭女

接ケさ丁四兄の家ヒり

如まゲ笑ふかけさ新ん

常ふ望ヒて

地のさ紅喰ふドチコ 椿

紀念寄テる白ロ 蘭

うんヌ物まで上さ額

やくどやテ

家ふ今ほど素の塩

あるを始忍んすると年
倍拿斗りでそい如房
まと合し
関取二玉がうる羅を
迷糸拿紙の越る表
紫る答る二間ロナ
東丁
紙付ると小異加り
吟耳為る雪長
フシ小い凝ら出声自嬉

一人り行業流し
書ケ名学で出り枕
まての紙へ拡を書
うつまらく
赤ど綾イ人のみん濃
防主よ地獄写伸表
男斗りぐ明カを身
乳よ出う
拿の主キ示コを学女房

蘆ゐが吐はく息
妙えなる 発ビル下話
口の内で
呵ゐ湾を原ゐ湾め
更ケと物根を中 嫁
観音 正代ッ佳る先食
前小かけ
是い選蕊連ての素面
大師 出ゐる伊達家殺
目黒園ゐ 業好き湾

三十越し
宮ゐ新役を費ル唱女
家の主ウ物ッ流を娘
延びた知人の養候合
ゑ ゑ 縁しる 利傳居
六根清浄
銀ゐ拾ウゐの出事ぬ人
大蕊院の行ゐ 蒙石
毎日ゑ毎ひ清ケる蔵
志ちくどん

夫トのかずくのぐぬ 綿
男の 拂ひ 横イ 結ケ
ふ足く空く 結ナ 留女の 孔
光女 房の 年代 紀

十分 儲き
命 愛の 内ふ 有る 道具
場 主 流 第ク 造ク 彩造
縫ひ 女 房の 薄ひ 墨
付 ふ 父の 孔 ふ 足
ち〻 人 孫 ゝ の 世 話

ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
麗 丁 第ふ 麗る
嶽 国の 延ど 枝 孔 馬 士
日 南で 孔の 垢カ を ゝり

ゝ を ゝ ゝ 支 工
辺 那の 方 麻 麻 る 章 既
や 也 人 ゞ 迎 ゞ ゝ 呪 ヱ ル 左
釋 ゞ 菜 ふ す る 揚 ケ 新
生 ケ ゝ 柳 ゝ チ ャ ル 章 既
戎 顔 ゝ て

越にあるあるよ霧雲せ
借りふ追りて雲風潮
拾ッて法師と彩ら通
解イるのだけ
あふ聲そんやキャ滝瀬
巖子の乳ふい吾ャふ家
変ンじゃふいと弓よ章既
口への四五数学ッ鯛
心一ッまん
ちるのあと斗り関の枕

仕舞ふとニテ
調子の去ナ女古イトを
繰ッて廉ふ楊こらべ
親父伸土の形るうん堂
サア物出テ
関へ指ビだけだを伸展
海花形ッ侍ッ章既
高ッ大拍ッ振ッ歩兵
すかんぢる
地つぼの飯てを磨ッる乳母

四条武ト云屋敷ニ

稀ニ出ル

ゑぐるゝ物ゆゑ也 紙職

業一人ヘリする寡のゝ

庵麁ゝ義を仕る女房

手掛イ為ばる絶イ女房

義ゝ手

人と同じ ふどかもの味

嫁候合も布織る形

今ハ絶ふゝる名の抑

遊客の雑記箱屋業ゝ

家が魂イの変年変

拾ふどや

義して猫を借る丁児

反りゝ ゝ変ゝ食

麦菜の墨ゝ作 深れ

多義紀聞の扱濡り

ゝを合わし

言ゝイと出る費上ゝ

関ト方関業ゝ

船ヨヤガ出ラル月ノ二又
今弾クモノ、凡ソ撥
無夢夢況
拙ミ
二日元ノ赤綿箱ヤ
降ル屋ノ減ル毛移ベ者ト
毛抱ウノヤケ赤野銭ヲ関
ホイ仕毒
行ノ利キ注ク出又大上
備ス方モ消ル捲竹ノ史

布ノ毎ス菊竹好
ヨ月ク
ヤジノ溜ル赤ク毒
種ノ天物ク弓イ鼻ナ
出ヒノ柿出チ仲土
鮭カク山
間ロ高キ備ル人ノ鮭
遣ル遠ク柿ウ幕筵
武市枝家ク出佛関
ムチヤ飯レト喰ル綿箱屋

教中かを学ぶと雖も猶

十一月二日

る付のへ用弦ツタ居セ

雰の刹とを舎不

何うぞ吹ケと特だの横と

エウ迭バ

嚊を相人よ素津ろう

たまろ移暴ろる毛別

ぎふゆう殺しそふ医者

孫ふしん

弱を流ラしと打咒

けすの相かと種車

出産ゲ持て来る京の伺毎

かさ持て

八百屋ふ眼むて芸ふ紙キ

花車と別カレホチヤル和尚

人の肩ゲらしいち男

嚊めを和がを京の端

連レの寿ケの屋クいろ

眼ざまて

家が繁イタ水もる丁児
江戸へ憑レ元の増る家
えトの女房へ憑レ家り
勝マレバ〜さ若旦那
いろさま チヤりハ法ナるの
恐ロしゝ
命チ考るを第さ
祝ひしている船問屋
いろとゞ関係三百貫
古へのヨトとる名俵

家田うしゝ
中庭を潰る粒ゲの者ト
家セ付ケル元の吟お家
内ヨ丁児の行る丁児
町紙鉄ヨ扇さ鄭り元
皆ナ地く家しゝ鬱る高テ
ぬけめるる
鼻溢まれる居る乗元
紅恵のるる神ヲ性テ
若るや如形ると で若ム南竹

又一も糸くを さゝぬ 聲
熱嫁も 蚤てのうる 毛剃
何ふ多 ふたいこかち
第ゝん ナエ
たゆふ巾 箱ク止ケる 蓑ウ
ゝゝゝが 止エふ 姫ゝ 時
仲居ぐまぐふ 狂機の 乳
二の上ゝで
鞭ガゝの 接ヲエグル 娼 女
ゝゝゝ 娼 女 ふ 借てぬ 花

更ケ ゝ 法下ゝ 巻ゝ 書
何ゝでも 何ゝぞ かゝど 美
神ン ゝ ゝ ゝ 園 ゝ
解ケ 法 弟
母の 顔 る 越後 獅子
淡ゝ 業ウ 仕ゝ 業 章 記
蔵ゝ も 賣て ゝ る 役 者
ふゝんを 飽イて ゝ ど 猫
棒端で
蝙蝠が 泣ク 関の 望エ

威勢を震ふ四段肩
法ロを拝ふ
白手拭ひが買ふ手拭
泥棒の猫に仕る奉既
可笑しい
ふぎし結ふ縁ふの時
けし新好の寄る美に指
寄小埋ひ法キ知ん
鼻凝っている立雑帽
汁タ新で第ふ命ふり

猫呼ぶ時の鳴の敷
笑って出られ
町風俗唱女の下ロに垂レ
門トハ四ッ赤迷イビラ
芝居ハやまし嘆髪結
裏ラのるでさく弾き寄
てアそれで
父ハ鬼甲ハ時長柄ラ
役日本菜新ごまと筆
拝殺ふふ猫唱女買

よ名しゆ

雪ふてゐる草履のまき心

吸ふ煙草の煙

朝日あふ仕舞ふ書

髪結去まそる社家乞

史ト八重ち年代紀

糸巻を巡く師匠の子

まさらいナア

菜箸まつて居る借りる子

書の見ぬ筆の水

菓子屋が茶むし茶の神

ちらるで日和りを法師

宿後の猫仕舞書

拘る叩キ

三味の拍子風呂屋更

皆ナ箱ハ客と傍者

女房の見も持ロ

根ガ好キで

アノ髪結さん布袋ん寿

菓を結ちのも踊ちまる

何ッの男かふやうの者成
面目も無イ禁酒酒馬
ぜんまんに仕ケ
いつよりたきれ門の出
義子の一人り涼ム亭
母ゲ子ふよ考ケる
子くぬる
楊で味ゲ考る乞食の子
子秋糸をつく嫁に
白湯の言の如家ちに

ふくれ
章既の雪隠徐ク章既
ヶ猛馬あて立ッ小便
際ワゲ立チ
歩ッる西小船湯
祷り付別ッふ雛屋の子
町チに子くぬちゲ製
考考ん、地ちよぼの乳
絹のまを
徳利割る面馬捻ゲる馬土

聲ふ下地の有る酒

丁度ニ合

蛮レ紙ヲ尝める情ロ色

父ゲ笑ふ子に彩る服紙

引延し

紙色紙ヒを考ふ若郎

ぞき人毒さし出佐を嬢

元ケ女ナ形痛イかづく

自性自主イ

中風の嬉しい美心

大紙ヨ持の孫孫

関ハ出ふ人笑の指藝

女房カト

乞ヲニ合ふ乞ニ奴袋

たのむの状の性ふ笑

一ぷんかふ川裏屋

鞭ハ変

楊の葉ハ出奴和尚

更ケても云又ふる若旦那

ふ紙屋長級ン澤ノ法師

変等を徒カ子や
拂ひ子供ふ弁変医者
女房ふ苦ふ踏しさ読
安ひ日看ナ苦ふ口人
為主ものして
隣りの嫁の笑ふ声
門前のろせふ事さふ玉
戸の咽イてあら大先生
ぞふぞふ
嘆ふ噛てわ夫脊の馬

初ふ人泣カ牛安そろぞん
殺雲や叫ぶの山の弗
ずこ〳〵ん一ウ前イ辻ジ
ぞろぞりと
穀レを苦しる乳〳〵ふひ
綿帽子為ものる大癖蔡
伯母ろふ書くて苦ふ傷出
毛日ガ来て
馳防の光カる　関
菊丸女房で　ム馬士

厚く礼を尽く楊仲武
名をしるべしや
鍍より味てい網を食や
法を弱り迎ム家臣の忌
此老女房より母節を
はなしてうい
国の餞ケのひ麗蜜
足の主をふなる能御
出乳母と伺レしや出来タ日侍
父の所タ之祭昌ゆり

古子ふ物り
嫁の虫ぶれ来殺母家達
拳既の嚊の深イ嫁と
雪ゆ様御を書ル丁兎
走ってトおりしん合イ九子
ちふるぶ色
京陽巳郷ふ丸ル巫湾
能女房の義ケ不他
天晴レ伏ケの分カル素
軍陽ケて

鼈の[illegible]が[illegible]樊ク練こ
女の波へ[illegible]緣でも
日暮り蒼ぐ ボレ蒙別
けふぞ[illegible]
り[illegible]雲て言ム雲ア水
近げさ波法馬土の毋
日陰ケの主う[illegible]ア児
てアを場でハ家ク表を
ふハ隠居の囲イ方
網始さし

見の屋く糠糸俗父
禁河の札を赤ヵを斗
ないさつ人の云芒ふ数ツ
姉ふん合ハ白蘭
竹捲備つて去数門行
芒後新へ云ル二度の聟
戻りり
云ル女房のうち巢ナ
徳ふ知ゆうん指う嫁
出イ 薮ハ さを代

澤りの世話ふ如ゝ蜜
を以て飛ゝ
見廻して
かんさし抜イて見せ
酒イ番ノ物を喰ふ風呂屋
伯父公へ重ね媚女
坊主ふ如ゝ泥棒
狗ふ一物ッ
家レよハ弱ゝ捨び先キ
形り下げて主ッ若老羅

二度目ハ不意ニ徒上座
番イの鴨の寶イ心
七イ桜のぬゝ様利足
女房の写ゝ佐ゝ
つゝ見ゝ
乙匹テ高ち高
家レもるみル分無楽
母ゝ後ゝ
磨く新
女房の不作で家を孔
穴ナゴみゝ

如来の掛けを紹介居
帽子へ祝がぬ扨子果
ちづむ小便せぬ云女
女房の笑の理屈諸
扨〳〵敵の近しし不二
すつぺらと
蒸腹の月を立て舞女房
切蜜切らの持て来女
南竹吸切れ寄る女房
云られね雲のあれ昭女

サモ高ぐとの示拂陽
竹ぶふさ樓の風呂の下
麦ぶ赤いは羽織
飯を一云ンで剣子行合
汁とりふる線
六文の芋モ学ふ下児
掛るまで
雲洗り出〳〵大善信
自傍して夢ル金津鑑
うつふふ眉ユの丸又毛刹

孫子の掾つ女中の場
絶糸を叉に亘渡
旭のごと
深盃に貫子の掾の職
百性の名る吏ね
恵紙の何のきうふ関
面名
吏トの付ケと呉袋の紙
義と残イ叶方の世糸留女
何只結ムて去ナモ度

一枕消ヘぬうぶ池
第さいる老女房
仮モの名筆ナ百ナ数月
概ナの古仏の英親は
正月らしい喜ケ書
を老ごと
拉ブ掾ケ雪綿で毒ナ見
肉で笠ぬぐ太刀ひ
りふい毒梅で名る出口

久しいこの
戒日名かぬ人の形り
風彩引きヤ出さナがる男々
されど月出産父の抱ル
主の力で
まど蒼イの番の侍るのきん
間はるるぎさ手形振り
唱女の紀タも初る手代
奥とあとこの店のこの
手伝も交ぜ

まど法を沉の法世佐さな
節の大工よ嘆手儀
かるる耳の君ヤ京家
唱女相手小芝居の
ちんぎふ言のハ変薄り
何のこの
紐カイ浮世かる唱女
銀子ハ通きこの私ぎ数色
二す切ふこ弾心口
弦りの詠トこ上ガル家カ

大京坊ぐ

青紙に越しかき毛彫
山沢らしん 海 彩 持
のる 第ふ 撞この 帳
筆沢ぐ ふケる 酒の 瓶
ふたるぎ

人の第ふ ぬ ふ 仏 ぐ
男の 嗜 ふ 人の 耳
流 石カテコシの 持 き る
日本 嗜 て

今 て 書 で 鶏 ケ 嗜 女
ニヨロリと 出 焼 栗 屋
ふ 髭ケの 持 テ 心
ふ い 主トい 嗜 ふ 侑
主 て い 大 持 ツ 日 傘
出 女 房 の 嗜 持

芝居かふ
女 房 ツの 持 屋
張 るの 出 不 叮 侑 文
古 文の 持 義 知 小 使

[illegible]と[illegible]

[illegible]を[illegible]て[illegible]吟ふ[illegible]

加へ[illegible]る[illegible]ぬ[illegible]ト

味噌ハ[illegible]ふつく[illegible]

たくく

[illegible]しぶの[illegible]心ふ[illegible]の[illegible]

[illegible]や[illegible]雑[illegible]樹[illegible]

[illegible]子[illegible]石[illegible]の[illegible]

[illegible]る[illegible]月[illegible]

[illegible]内[illegible]く[illegible]富[illegible]日[illegible]

[illegible]れぬ夢の[illegible]

[illegible]ぶ

ヨゴイ〳〵[illegible]亜[illegible][illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]工[illegible]る[illegible]見

[illegible]の[illegible]

[illegible]コフ引[illegible]

女房の[illegible]の[illegible]海[illegible]

[illegible]ト[illegible]

一向月出[illegible]

植ッてうゑ物を藝子
うゝ町の名て咲ハ色
色とゝ家こでのあるそれ
暮ノ暮て如ぐるうゑ夏の庭
如顔のうかうう第ハ唱女
うんどそみう
ちうう君はまやうさ美
寄臺の和ハ嫁乃ハ化
大ゝの人ゝ出せ数酒
身の程ど和ら

今に起き屁女又
只の女の乳ハ高
うゝ若ゝ高ぬ金ハ乳ハ
秋ハ絶ハ
女唐ゝも好ハ物
変も流居ハ猿性し
下植ッの童をイ立イ洗ッ
さカうう
彩和移迫ム茶斧音
口への出又の結ビル

陸奥の国の越後三十日
市に出る郷
みんな帰
姑メの帰る
とは思ひ出す
天物が来る
武蔵のさいたま系風呂
敷ぐらう
秋乃長系又
日が暮れて

女房の嫁しうとめ
庫屋ふ法の天神文
ふ接ケの中ふ幸所
根ガ生エ
相撲も見ぶ
日本人
ふ系ム窓の毛剃の縄
動かれぬ居職
ぐらもすつと
小判吹き出す

狐仁の為りく狐仁九ア
ちぐ〳〵まつ〳〵母を養ふ穴ア
きてる借り指の寝ふ唱女
狐の附イると章所指
ゆつけて
チョイ借りの利クホ戸の喰
アノ鬱面ぢの喰ウ実きか
るの実をする風景ぶん
宮持蕎む狐と食
喰ふ狐ウを引狐と

浸イて来て
肉ぢへ物レる老女房
鰐の抱表似する庭安
ぢちらが章所且那
狐を馬で
代わり清茨汚唱女
ゆふ指とおりふ章所移
帽る人がいの子の女房
ぢぢがれ
唱女の逆ぐの主人

鍍屋の猫も若く殺生
女房の嘆ノ家レの好き
やうく
結ふ所メ子つと指ビ二本
のびら寸イてゐる手鋏
家がせうじ付るはかんそ
エラさいの
雷の糸ゐる二軒茶屋
鬼びを上ゲ立つ居は
茶ふ鼻屋うを浮き沈

何方のおんもの雲ル新レ
幸にがおかりて遣ス松
得マ掛ラ苦ふるる苦ラ

首かさもの事

ふぬ丈へ丈ヒ抜く素
鞠りの相背をかぶる姫
思りぬ思ふ仕く南中
宛ナへ渥ふ紅戸路浪
藏の性根ふ越後獅く
母歳を傳ふ南州盃し

鞠ふ若ふ女房の情ウ
捏テル男ラ　母馳メ
雲の毒ふ
出しの指の書く丈
大ユへ宿ラの驚
邦母ふ武牧持ツ幸況
地連の仕ツケる女房
下ヲ目ふ人ヨ仕ル言ン
傾ケれど
雲ふ若く母の

菊屋の掛ふ使ふ掛
付、四五ヶ所ヶ並ク書既
居の紙ヲ一ト ふぐり
如龍ハ掛ケて傍ら女房

別ふ

語り人もやさい家よりも下へ
関、網切き酒合の関
女史如て行くを示ずけ
をう道から
来て、居ワル汁上戸

結ひ嚊結ぶ
裸かぐげて来る島
理屈ッ俗り
唱女の国でる
莖菓を傍ら風呂場
寄行って居る辻易者

ぬうぬ
押ケ寄の袂ト 地
糸を示ふ 河豚
駕の行タ棒も徒ら屋

丸葉も壹る小間ある屋
旋りのし
泉水庭を流さあり
築山のするも庭中離イ
慈母まさむ書の留め
まの花に足る書の辞
けあるまゝ
勿論係活力の章程お
尾交んたる佃丁兒
戒播うゝなる生洲

出す遊べッます
遊屋丁兒を呼る済ナ
湯屋で拭せぬ女房屋
章段の龍おや大極上
庶カのおイまん無類合
だくさま
世話も流行やまる無筆一医
師匠唱女の居より中
目の出同屋となる庭
髪目の品なる硯り箱

せんぐりふ
兄弟より長ろ新ら屋敷
長のおいどりまふ長の
新新荷物も国元三編
へーしこんで
たまーまよとの長ケ谷を
女房の去ケ沢ろぬ渡メ
物まうう一挺小清ル関
伺ふ行ケぞ
糸トガ愛じゃの去と個ま

下児の軍ヘ使ヒヨロ〳〵子を先ム関
童隠ヘ拵テル清ル駒
目を始ジ
拵ン一ワ方ガ中ぬ所冷
凡撥チ渡ム宮ど
細男ニ小長ろの毎
隠ーしゃ
長の世話いぬ主の節令
江戸出唱女の長カル鶴来

地福ゞえの彳亥蘆屋
ぞんぐも上位上位の味ゲ
日ゲつんで
夢のムカ〳〵彳亥立行
マアふんふんあゞ蔵屋
拂イ駄をむく紐を物
下をの嬉しんまの職
百走ハ鮮〳〵美佐まル
玉仲夢の学く宵の声
辻で別カラ〳〵彳亥計ヲ
味マイ味噌汁ハ
安房で学 言イ 事
時〳〵味噌ぞ
吾亀ゲ園ル赤うをし
上郷の若造イ園ル中女
小家の止こぶ善信小家
息子の吾アふ毛男伯父
仲居の坂ふ小の家
大きふ堂イ

芝居座ろるゑびんかさ
姫ご尾で嚊が雷屋屋や
ゑれを望れ斉十鰻
地とまふ〳〵
下法者ト主もゆふ如屋
口入の書の工ム紙々
書の出〳〵に国平り
張る答ばや
四五人逆さの婦めふ若
内ちかト〳〵出如越紙

引カ〳〵や福を現る如夢嚊
めろ〳〵
屋者が家打れ猿く軒
元ろ行屋の多御る
五十や勝手呼ト屋角力
一度附〳〵行法所
ゑダ多孔
帰り〳〵義文する寄々
芝数泥法ゑる竜廃の御
酒ガ呼イと後家の屋り

先く素心

鶯の外トデ森の入る野

末結ふ迄ハ

泥口川下りと泥口島

新宿

世間で雲カを傑り出山

剃ワイ隠居ガ切隠ヤ

嫁ガ拵リ独女房

伴レの道ヲいふのを

ウリで出ル居るお山

唄ン独エ

帽子の新ふ物る女房

通ヘ巣の方ひ年

噪ヲ清ケの独イ鶯ヤ

鳴ーー

拵リ人ガ兵隊の方

四季にハ自宅の出仲居

ウ人年登エる女飛

ウケ合ま

姫を去迎ム素扇扶

[illegible]が[illegible]ふ唱女の[illegible]と
[illegible]と眼が伸人
女房うさ[illegible]奴丹開[illegible]
出居いひしる素の燭イ
[illegible]い吉日
[illegible]の[illegible]唾屋
[illegible]ふ[illegible]く女房
紙入[illegible]の[illegible]
錦のゲツツのもり素紙
望ハ[illegible]見[illegible]あれて咒

[illegible]めが[illegible]と[illegible]の顔
[illegible]で
[illegible]ふ驚[illegible]累[illegible]者
日[illegible]ラ[illegible]皮の御[illegible]
[illegible]る[illegible]る素人[illegible]
[illegible]れと関と関
[illegible]の[illegible]ふ合[illegible]待
迎[illegible]
素の[illegible]伝る聴[illegible]女房[illegible]
今ハ[illegible]もの小影し

戻る冷し、二度の酒
初しと小鶯と家を初め
主の祝つて居る酒
近の奴めや夏の撮
多代の親の年緯迄イ
婦屋が迎げる家の門
迎て来る
母の志ぼる花の幕
迎ると拍子貴徒人
姑の気の晴し嬢

チヨト元祝う
関へ知れる唱女の眼
まての代りエ下ちき
清子と月見る結イ男
被軍ら
戻ク為ふ雅ヨ蒙ウ
男の体ら吉ム南十
女房の解りきの小の理
代む重エふ行章沢
婦中に笑カレ

崩ズレかゝる土手藪
幸氏の嘆も俗搾き
氷上郡の婦人
鞠の為搾しる絞団
藝子よりまゝ子親
嘆の手利の子の日雇
ちゝをもら
実く車かゝハ丈ケぬ糸ト
あら如丈てゝ母様々
浦ヤまをかう者人乳

の所在を尋テ歌ぐんん
今よりまで押通り
大キ赤疲ラ、吟ム菜漬
飽ようけて
日よ境ケよ鍋連レる伯父
人、指動のム絡げ
一ヤ ビラの出一心
わり結ケ
動ケよた人のあれ唱女
ゑ公の朴くさこの上

究ナ君ろをしまて、常(つね)ハ
兎ひちゃりじゃとまて孫右
中ヲ小立ワ身の人ト讃(さい)ろ
そ(そ)不(こ)が一の
さ手継(つ)カあんざ身が有イ
粋(すい)が誘(さそ)ふさ秋の猿(むこ)
する経(た)トのこすけらどあかん芸(かう)
うし誠(こ)しで
チヨト若(こ)コめて居ル女房
小刀磨イで居ルヿ児

おつトの労(つかひ)ふ神手形
アタ何(なに)らしれ
底(おそ)らハ続へ小袖打
で出縫(ぬ)ひ留(と)める嗅(かざ)の慈悲(じひ)
系(えどし)継(つ)ぎ小労(や)る女房
念仏中
嗅(い)き紛(ふ)カ花を芽(すう)ふ辛
今ハ着(しま)小而巳孫ハ扇子
幼(いと)女のふろ義並居乳母
らん鏡(ちりん)ふ居(い)ル丁児

其ちらの地獄帳をタモ
ゆぎうけ
六丁目者の四國行
長夜ぐんの解脱を穀伝
石地の鐘か埋モレ判
二ツ三ツ
奏ウ孫ト雲か舞ヶ如房
明ケりや明ケ戸へ鞘か抜エ
お*義仏も寄ると喝女
元役しく

踊ッと踊ふの鬼ら後家
お乳母ッ隠りを初男の鬼
母いがらう思ふ閑
鬼へいらふふ
鬼猪ま仕迎ム女の子
鬼忍ふ尚ッるかものらう
血祭鬼の若ち史
三味ち箱ふ泣く鬼ら
鬼ふさぐや役つくし
坂カぬけの伝ち天窓ッ

ぽつり〳〵
戸棚の引レホ母のヲト
云、ぬ爰ヲ大縫る
ヲイ叮り人を呼出し
かつく〳〵と
まの日まを連レハ母
根レが減ぶしと泣ぐ姉
夫の係酒ホ止ゲる 書
殺ベホ夫ノ妻の
駕もうと徘徊

つん〳〵
弟ぶけハ奏る赤レの出
ウと登ふで方男
仲居ガ行ふ三ヶ日
毒ゥらしふ
見ヱぬるホ学ふ 綱
輝るキ父、他人の眼
ヲる義ウ山寺ぶ
ぶ寄ふいで
一トに吾シさ峠ゲ酒ケ

武反ンて濃る嘴の屋
敵の獄延げた濃墨筆
鬼ハ云イ

世伝すると梅不口
人並と夢云う雲釈文
無孫で借て彩る蛇ノ目
だんだんと
蘆子の新が鬼ふ云へ
尼り繋ぎの嬉しい義
私々しゃ言ヤイ亦頭中甘

拾彩義
文ガ伊カしさ尚言事
鄭と嘩くうるき船
今ハ女のかるを人
叶ル知て鍵の味ヲ
徒イデ夢ふて吾ム前中
合点仕ると
苦の歎マされ脇テ拠ム
ヲ門トッこと越ル女房
亦書の方ハ慈勧ンるキ

麦の皮で

ふいごんぬるかりの
喰ふ様しら迄喰ふ様
美がつのるく香ゝ行
ゆくとゆふ物ふ物る藤
牛も馬ゝ
喰りた程トあと女房の若
焼美ものく第ふ和尚
きかのこつる大石姓
欲を味方

殺明カし宮ふ第ふ
乗茶さんのは原切
首切り迄和ル家質チ
日の出ヤナア
仲居の活ゝを迄氣ン事所
たで孫ゝ去こ中想嫁さん
ゝトの横ゝの子い藝ゝ
ふゝさハでふゝや
殺を喰ゝ喰いふ
居ゝへお吉ゝたゝる仲姑

親方ヘチヤルた招でゴザイ

ふぞりめして

たどんや嘆の鳴る音

何ふゆく君とか親かより

ふい唱女の釋仕ミテ

あんぞも清ケ迄

ふ中軸の樂家鳴り

はびや嘆の出し所

人の恐る笠ヲかぶタ

おトムの配イか親仁がり

見ぬさ離り

うんと来止こぞ手代者

君ヤかお連レで遅イ吏マ

肉徒冥ワる自ま工唱女

千ふ一ワ

書も中て見ん為か為メ

[illegible]ン芝居の方ヘ手ん家

おトまだのゝぞ投ケ奴駒

[illegible]ふ物じや

せめて帰ち人名ぶケ

歩ぜうり濤あの罷ふ嬢
数ひの切箱かめる伯父
箇所ふい
苔ふ飲稔く買ふテイヤ
相ウ手だまてある鄰賢
香ムが遠クこまふし方
神うて
次キの地越しの日を唱女
事訳がヤ上ゲル嘴ワ
着ふたりあまた女房

布箋影で
啥ふくそむ云イ居俵徒
飲ふ風の箒トの居せうり
香ム遠ク箋ノる用ド連
そが姫へさ
第風第ふたる孫ざと像俄
映元の糸トふアせ家ル
嬉しふ包ム鞭の着
沢山
涼ふうまと嬉菜見セ

烏帽をげあた系親父
独り翻ふかぎの 完

こぐ〜まで
りの思りげ拝ぶ馬マ
妹ト麓子も封じられ
来るあり物りた飛沫
揚まが縫ひ
も家ふ一人ゐれ何ウ
こり毎へて亜ク老し故系
同下タ足森へ出ス拝り

今ハ言ふ
端マもこ足も家レが巾キ
琉球島ガ地元ふ入り
消し炭ふも手で拭ミ剥レ
ヒトイ奴ッ
辞ふ付ク足よし付ク俳記
近ケ身が毎くの泥亀馬士
帳と和歌筆窓キ出ス色
下法ミて
冨岳の足くる女史中カ

彼ノ家へあれば行ひ程
道だうの行ク雖女房
蓋ひらく夢のうの口惜しさ
中家虹へふ人へる迎ク
ぞふ仕イドや
行身へ埴ハしと女房
際屋の夕びび笑止ア毎
繋ギ牛リてや立ケ奴賞程
遣あさねじや
第ふ夢ても大家形

書院の襖然る立程
拘るの情バヨうたくさを
数ゴ立り
藤江のまれゴ高くたフケ
安イ南仲ゴ拂イ云
タゲを云張ル藤を更
糸乃中あ
腰ゴけ乃程へヨくイ中
清十下ガり程の和うん文
夢ふ仕仰せのあル義清

天物こゝろ
ハレ鼻ゴ鼻ゴる濃ッ茶リ
ちひ手拭ひ葱カ
裏中の髪結ふ毒ケ
後ラ忘ゴ
唱女の法めるの様の
恵毒イかゴる上ミ
毛剃の指デる剃る除
チ〻チンデ
数居ヒ食の拭ガヒ除

繋キ〻ク去ぬ肩ふ枝タ
幸所ゴ拭ガ去ヒ失ふ箱
風吹の張ッ
永髪剃又の古艶世話
強ふ触ゴけ〻たのむ関
強ヨイ知ふ狸裏ラ
ちち雪て
竹の皮雲ふ毒中様の毒
仏教幸所信風義レ
一人りたべてゴや傳者の毒

白服合イ

所ナツ〻ス幸所持

丁児二人りで不自由ナル

天秤ツク機ツク

めぐがえり

地内の名ばかりチヤリ語り

出りや面白ひ事ナ影

備ゑ面白イ芸ル

けつゝ小

出いとゑの出ると一人りて

殆ど産ンだ後普請

女の活ハ別合場

雇レがさ殆る後歌題

蟹昌して

ちゝ〻袋〻のふ毒ま

いかち海ふ居ガ

ま家重濁の蔵ル女房

かさ〻〻

けぞ〻れ〻せ奴ひ義

袋口の切レさ偽人

ゑりの元時ハ煙イもの
一筋ものでゆ
しハ自慢ふ外母の里
者ヲやふ達ケふ同家嫁
一歩者ガ涅ク孫ものの捨レ
出川ものふ
のきんゝ引ク丈の種テ
絶イ家家ユ角ン住ル糸変
男ヲ郷者と上ワ出キじゃ
明ゝであ

大船ヲ孫チを捨る義
ゑり捉ケガ同ふ家角ノ名
地ゝ小紋ゑ仲居
関の地ゝポヘレの手
はらじまセ
地好キの紋も有る奥義
者豪沢明ケる庭自慢
志も伯母きの糸でい
色ものじゃ
て手前拵イを御ビルゆ

余家戻りが出力なきり
巾き立テらるゝ更ケる髪
納てりつけ
寄ふ剃れ計り父の猶
皓故十方空出髭
家ゐ陀顔も皮ふぬり
拓とがれて
傘掛ッていろ小便の間
手剃の体ム関の鬚
婦ふ寄せまれ捲鮫娃

酒屋へ走しる鮮ナ妻
鼈イ追ハしまれ番らさ
ろうしや香や
墨掛て大鳴るたんを
とろうりへ襟て掛ッ笋れ
ますトの砂ふ濡さ篠サ
殺へおる餘ふ寄さなへて
髭ケ剃りく来さ芝居累テ
先生のむし
隠居の髭をぬく妻ケ

一日素麺で暮る仲居
腰い小弁慶の横ケん
そんあうと
お盃レ深々る藁の家や
祝法師ふ幸所物
地毒ケさんのまの縁
ぬうりハあん
去ラヤ去又青如ま麦の三味
父ハ嘯く抓る付キ
味噌ハ小豆ふ雪ふまる風呂や

流浪して
金かんの有る毒の尾
毛三ッ切まの去ぬ猫や
さしさしの如ま小後ノ後
女房ありや待
彈イてもさまる浪ぶか
月又を一ケ度ふ備ッさハ激
たのまぬふ叶そそぐ汁
芝ハ沢山也
三ッ又弟ふ屋敷の状

何の船筆ム謝セ初メ
吏の賛イてぐ有さ風呂
さん開ゲ合イ
父の仕てきルるか妙
書ゲ出上手がる手歌タ
宛のエラそふ撫下ロし
無礼ふぐら
お茶ふ居レで苦ふ篠茶
眼借りゲ知ずす出濱ナ
東在のちつと出張ル稼

小山時毎レで
出世若ゴ及る事伯父
蓋ムら乳係トの別ワイ嫁
寿ケの控テ奴飽イさ三味
驚ロさ扶持の苦イたいこ
何ふふか
第理一ト遠ふ見復
るのおさん嬢ム事既
髪ふうを呼ル吏マ
かず紀ふ奴家親仁

いとでみて
神ホ所りを知る孫で大
嘸手利キかる年一 紙
帝シ見ナをテヤル戸ガ丁見
病ム女房の吉む茶り
一ト箱ホ孫ふ麻のきん
世間シ産ふ
ちきんとふ和しさ
引ねウふ孝もみん義る
鶴どの活ケる花び先生

けうとの警固
澤りの警古屋活ク味噌屋
りふ先シ役のみん義遊
小山も関で立テて入り
ちらちと
驚る茶ふまの子ある妻
家カ孫淺ふ穢ゲ淺あ
関のちあちち南蛮香
妻イじゃ
ちいたあさの西コの傘

鍛の毒々味へあんそぐれ
新の臭さ引き場
廣げて見て
きらの自慢するうつぶ
あぶ小イサガる世界の器
氣レが味マグる塩もの瓶
又の余系ホ普請の器
付ホ多ぶ結ろ
世帯場迷ふ肩タホ幕
井戸の猪手ハ書く振り

張り替チで立ち通ひ道
汗ルぶ立
表伽キの多ひ大屋居
限る孫の好ク長ク人
伯母書くと見義理ろ
書出ハ夜と連谷板
知恵の借り人の多ひ伽
書トろし
鍛ト法刑の立居
森さ知留ニ出て製刑砥

まと近の海を筆ム形成

傷俳諧

高郎吾ヤガ〳〵ふれやりて

髪毛も近ばし沼子近し

沼津の蔦を手ら筆所

ぶれ与ふ形ぶや大石蛙

竹鳴き枝ェガおれ手場

蔦の俳

俳ふ俗父きく蔦手動俳

手〳〵ものふ手ふ手ふ俳

弾ぶがりまんの接ぶ

首の鎖ハ一トト世 第

鎖ハ

女房の変メる夢殺

殺レ飛ひぬく父の死後

男の妻々変く大女房

寺で拝ぶが定家ま役

碑〳〵人間の一人り手ト

名を張る日ふ有ら手見

蔦ロと俳重と面ふひ

ちとかゝり
ゐる往姫赤い到ヶ
らしし大キウ履り丁児
四五才ふるる女房
嫁ちんとも色い個市
子代の赤ヨを幻る嗅屋
鬱の細ひ張ヶ加ヤ
七又ハ子向ちひ着結
ハ色ハ色ハ
目強格の集ふ屋り眼

まヨ結ふ仰に高ケの子
前ヨの女房ヨ男ちん
幸所が格テる紋の紋ち
陽る粽キの咎イ心
大鍍挑ケてる毛刺
まマ小照レ人の若ち女房
ヨラ糸ーニ
子の十ヨ綾ち格コ蜻ヨ
百目の足ヶ場嗅る女史
庶ケ加ーの水源丁児

数入ト女の病ダハ屋り
を孫ト
和ゝしとゝりふ更しさ
郭ウあるルべきか笑と紐
女房のそのあて夢ふ酒ケ
笑事を
煙草ト注り作病下兒
郭のキよ女房の完ナきり
も家よ古ひ者を世孫
そのてもなるさ

家の和いしうたべる鍋ケ
病クが作物べう病ゝ笑級や
年素の考するす七房
作ぶんをうあた世界
まつて天色
郭が降り〳〵妻の奥く
弓支ぶう活た女房ぶう
女の芯明カさた若
附郭りり
郭らぬ年の孫ふ出世

至極結構なる
貴工の腕を始め甲斐
十畳敷で
此書ハ書の
切レ人ゝや損をもする唱女
技倆デ歌ヲ謡ヒ
扨〳〵居中辞儀
殺ずそ
信を善信らしん孫梁
家ゝ貧困の言ゝ書

強クイ渋めを老イ活ケ
のりゲ来て
射場ゝ俗俗も元元蕪る
好キヘ知うける居ハの尾
蕪るの親ゝ意イと知り
ゝふて来て
楽で俗ッ半リ仕業
まず悪九るの匂ゝ唱め
女房乃隠を俗母のさふり
唱女の居る上ワ様家

持ふ仕まつよ
日御子ゝ余經殘りて道
濁カぬ判り湯ゆまき風邪氣
先生乃ゝ
かゝ謂シかゝ
ゝイ歯で噬ンで廟會
信ぢけふ居エる石
累ちいぢゝ仕じゝ謙の言ゝ
遠へゝと道著解ゝを判
八尾酒の沖ハ光ゝ

まで
活き歯して苦ふ新遊
狼子の切キ謂を智女房
輝かゝ嚙の結る舊ケ
大キ小狼子を振り眉
三日月眉ユ
花緒で足の足ぬ下駄
首玉色テも居ナ仕立
後口へ言シと蔭ひふぎ
江戸西の風俗ゝ物ゝ

後ト了 女コ 樂家入

敷ワヨ入ワテ

夢張リ上ケテ ミマ ハ

摺リ紙ヲ 摺シ 母

吉原寫テ ホ 舟人

雪踏ヨ履カレ 振ラ 肩タ

そ和 遅イテ

リ ホ ラ 絵ニ も 盛ゲ 勝

引ク 髮 也 ホ 而 帰 絶

キ ラ の 經カイ 女ナ 医者

ウ ツ ホ ホ ハ

女房のチヤウト 拵ラ 式来

有 髮 ホ バ 毛ル ホ ん せ

向コの 寄めゲ ば し ラ る ま ホ

行ンラ ヨ ホ じ や

十日も 先キの 撞 麦 實

百姓ヨリハ 同 ガ ラ 麦

ホ 近イ ガ ホ ホ ホ 下 法 の 山

つ ま ケ ら ま

ま ホ ホ 哭 ホ て 付 ラ 昔 白

女コたぶさも乱レぬ髪
弁ニて差でぐるる高
籍キ〳〵のレる清ビ一文
切〳〵銭
吸和懸ニ吾スを酒ケ
き〳〵咎ヲ過テが後ニ材
上下賞て黄ロさ糸ト
シテ〳〵振ふハ
陰をしこりかゝる
服を働ラかし車濡し

袋ンの御経ニ経急実く三年既
為ル濡ぐる
たゝん一ッの古失ケ
修ラるるの悪ル
世間一ぐ釋ル書
ぐメるるの言ク変ラ業
居ラ者ル貸懐採繕掛ケ
如房ラるを居リり蜻コ
引詰ツて
初も三角ふ〳〵菊中盃

そちやびんぼうの貧乏娘
ちびのかぶ姫
紙の面うら黒に職丁兒
先ッきしかし
書へ出張しの出仕文
ぶちしと書き
はらしまちが筆錢布
一時小解く笠の紐
まつちシヨ
笠を咬へら棚下ろし

紫ケの間でも貧ゲ通り
まで指ど先きの長ッ奴駒
皆ナ息キ杖をひ竹
とのはふアロ
近ゲ沒藝よの指で角ノ
私タ一ッ仕ッを桑相
女房の行い先キ折ら色
強キのやしに
三文出して蕎口
母ゲ合ハして麦ヤ関ス

[illegible]の[illegible]ものと言ひなすものと
女房の事陸奥守殿と[illegible]
母堂代の後ろ[illegible]
二人りの下り[illegible]
ちらし[illegible]延べて[illegible]
入り[illegible]
言へと云ふ如く[illegible]
[illegible]切り[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]

以
[illegible]延ヨフヨヌ[illegible]
[illegible]
出家の[illegible]の[illegible]
[illegible]
送り伸居ふ[illegible]
アンナ[illegible]
[illegible]を出[illegible]
三日月[illegible]
馬一筋[illegible]

けんまゝ小屋てて貰ふ縮を
小屋てぶりれんかは屋を袖て
おらぶの笑顔
結メん迄ろうぶい寺
紗イ之ヲ髪のだすし流キ
てヨロ明ケ叩イさ子
ぶ性ウヤノ
撥で脊ヲ寂く年毛尾
ろろう表レあ筆丁兄
ぶり屋り踏ヒと縅のみて

中ゝ妙
摺ぜし合エ奴のみ巻ヒ
アリ法面像でふん撥ゲ
蔓ンドつる
男の面ハ 眺メ 如
義ヨ但ウしさ云レぬる
女房の摺しふ四文銭
若ヒ好で面れ動ぶが出ル
すぐじゃそく
ヒ兄ハ房四ヨお縁ヲ有リ

若垂レガケのチョイのんこ
後ハ立テ以ふ走トの元
うつと幻ぶ
ふハ撃後の扎入レ日
ぶふしん初イ後立イ
世界の大キ物こ階
撫カケ方ふ
摩そぶ脊中へう寺家
持テ行ケうと女ナ構
摩ホロぶケもうの息キ

屋りうりさんへ屋ろ階ン
一合で一里ゑるレの張
一ツも方以
指ぶ撫り物ガ糠ガ毛毒
毛剃の脊中カ高ウ日ケ
丁兄のワガ元ふ法走
打ケ吸ー
史を借り合も立後ノ徒ヤ
前蛮レ常の元さんぶさ
我ー内方タ法後昌

いろいろやうの
田糸帯シを深ム幸ひ
皮の指ど拘る帯シの数ッ
眼ろく個の帯のひろ長掛デ
鬼角浮世ハ
私しゃ本がら貧乏女
房のもとたのも
苦を吟合ふ合
ヨッてまた勿体無
形々やうやナ

まと仕合でがゝ盃と
伺このんてもへイ子を
新イ女房の毛移る嫌キ
恵行まふ
おトかゝろ、ぬ伊達を色
能ひ新恵かして繋ケ掛る
掛ナそゝし仕る新女房
アレでハナヤ
賣レと酒屋の汲ム女房
子供の好ケよ尚ら自家

孫兵のたばね者と侍

眼の前で

お疑ひあらかぢの封

正々しふ足付る筋ゑ

結ひ女房の出しと古タ

けんまのシロ〳〵侍ッ業用

夜ルとも

皆ナ和絙屋の店仕事

唱女のるゞ元こかく・足

見ひ雪ヤ身ホ前羽織

世話のうの事浄瑠璃

まくるの和ッその

雪の時半ホ唄ヶ六ッ

白湯を汲て平ラ彩ミ

おくさのくロじゃげホと唄女

庭西まて

踊り多がゞ浪うちも

出イ〳〵〳〵玄ヌル相屋張

チョイ家り活カを閉肩形

吏レゞ成ッ

帯も乳の根ふまで新解
吾ムと生しやしたの磐
何をさしても行屋中
塔巴ふふ
強を巻ふた爆の為主
布風呂敷ふふ孤織
ウレ髪結さん下法の代
拙くよう清てるる茶を
遊まれて
を弱めいろく流球諸コ

銀さちる拵ウ鍋船人
二枚の首が四つふを敷
エニ辛らん
芸ふん燥ふんの巻り燥ふん
農業のおカふ蔦ふ孤織
女房の紙がハ間ふ用
門徒仏ぶん
髪と高るのが芸ふ巴
雑巾ヒ巴も茎ふ深り
口入の身上カ高ふ

蓋タ祝り上
度の経験が乗ってら色
残布をうるに味屋嘆
素面でいめまあいかまく
嘆ケまません
をふがるまの若麦月勝
酒とあるでありけや金
飯ケる屋ふれ拾り
何あるこの変ふ
幸況へ様を付ケ見見

片拍あるうち先キへ立ち昭女
かぶうち立テ
皆人まんの線るあ居セ
ぬよ上ケ意うあ余ふの者
中舞屋のうひ異ナ
変人じゃ
奴コ中の大世異
運レハ信イぶ者ふ
来るう去ぬ嘆のう
のさぶう逝り

馬と一ツおかる仕る小使
拾りの手ちらし生合
仁のまれて居る陸り押へ

やハ寄ふ
何に苦ふ和ぐて歩さ好き
書の森て字く陸りの戸
先イ天窓を抜テ出し
所へ居ル大松屋
ツイ滑りく和ぐ
鬱るの指どの切り心

不思議ニイ
足ら知し私ク丸彌ヶ
けすも来ふ
ちちく尾りぐ陰ちく
書ハ今の分を紙ひ
緒よ甘ち
筆色ら裂レも形ち
別ちちよ提る根金具
女房ハ風呂へ袋口着せ
手拭拭ちた赤ちり

原書

辻居引かれ京ら
女房より仕うまつるを外トの用
毛利の元を家ら書ら
ちらと一冊持てる
ヲンハ生洲の仇場技
軍法書ものし
後ロかげ見ちらん所
菊叶ヲ迄入りや菊叶入
アノ佛壇も四方十面

紙ハ女房ハ高しハ
図イ高りやマアヲひ揉ま
曲セ者じゃや
ひらひらお古屋ちゃんびを
まし中繻子のぶらか
通ヲつて駕の紙ト白ふ
ちの流かるる高ト

俳諧冠嗜 腕くらべ 大尾

文政九年丙戌正月吉辰

書林

摂州兵庫切戸町
新屋宇兵衛

大阪心齋橋通博労町
河内屋茂兵衛

同 心齋橋通北久太良町
河内屋儀助